

タイで遠隔医療支援へ

山間・農村部「妊婦救い安心の出産を」

山岳地帯など医師のいない地域も多いタイ北部のチェンマイで、香川大などのグループが「かがわ遠隔医療ネットワーク(K-MIX)」の導入を進めている。周産期医療の質を高めることで、日本なら救える母子の命を守るのが目的だ。



K-MIXの導入に向け、日本の周産期医療の現場を視察するチェンマイ大病院の関係者たち＝6月、東京都渋谷区の日本赤十字社医療センター、プロジェクト実行委提供

香川大などのグループ計画

タイでK-MIXの導入を進めているのは、香川大のほか県や県医師会、民間企業からなる「遠隔医療支援プロジェクト実行委員会」(委員長、原量宏香川大特任教授)が支援する。今年3月には関係者がチェンマイ大を訪れ、連携オフィスも開設した。

実行委によると、チェンマイの都市部には産婦人科の専門医がいるものの、郊外の山間部や農村部になると専門医がいないのが現状という。一方、インターネットなどの通信環境は比較的良好で、K-MIXを導入する素地が整っていた。香川大とチェンマイ大が交流を重ねているのも大きかった。

今年度中にチェンマイ大に

K-MIXの機器を設置するほか、小型で持ち運び可能な胎児心拍転送装置(モバイルCTG)4、5台を、専門医がいない病院などに配備。来年度から機器の運用を試験的に始め、モバイルCTGで測った胎児心拍などの情報をK-MIXで地域の医療機関やチェンマイ大病院が共有していく。

K-MIXは、県内では、CT(コンピュータ断層撮影装置)の画像などを別の医療機関に送って専門医が診断するのに使われており、県内を中心に約120の医療機関が利用している。K-MIXの生みの親で、プロジェクトの実行委員長を務める原特任教授は「弱い立場にいる医療過疎地域の妊婦を救い、安心して子どもを産める環境を整備したい。タイを核にして、K-MIXを東南アジア全体に広げたい」と話している。

(渡辺翔太郎)